



# 木材で高性能ロードバイクを 船大工の誇りを賭けた挑戦

19世紀初頭、誕生当時の自転車は木で作られていた。それから約200年、自転車の素材は様々な変遷をみたが、最近、マホガニー材を用いてカーボン・ファイバー製に匹敵する軽さと性能を実現したロードバイクが登場し、内外のサイクリストを驚かせている。話題の主は、江戸時代から続く船大工の家に育った佐野末四郎さん。(財)JK Aの下重暁子会長が、木材の町・新木場にある作業場にご本人を訪ね、自転車製作の経緯や今後の抱負について聞いた。

## 木の弾性を活かした自転車作り

**下重** さきほど、実際に木の自転車を見ていただいたきました。自転車が19世紀初頭に欧州で誕生した頃は、木製が主流で、博物館などに展示されているのを目にします。でも、マホガニー製というのは聞いたことがない。リムの部分まで、木でできていますね。手で持ってみるととても軽いのに驚きました。どのくらいの重量があるのですか。

**佐野** 昨年1月に1号機を試作し、

徐々に改良を加えてきました。現在、もっとも新しい4号機の重量は、7・7\*です。一番軽い素材といわれるカーボン・ファイバー製で、6\*台。重量面では、引けをとらないレベルまできました。**下重** 実際、これに乗り、町を走ることも可能なんですね。

**佐野** もちろんです。お客様にお引渡しする前に、100\*ほど、自分で乗ってみて異常がないことを確認しています。この4台目は、スピードも時速50\*を余



裕で出すことができます。

**下重** 佐野さんは、江戸時代から8代続く船大工の家のお生まれですね。13歳から船作りの現場に立ち、今日まで、ヨット製作に携わってこられています。それが、突然、自転車作りに目覚めたきっかけは、何だったのでしょうか。

**佐野** 4年前のある日、向かいの材木屋の外に最新鋭らしいロードバイクが止めてあった。カーボン・ファイバー製と聞

き、待てよ、と思いました。自分は、木でカーボン製より軽くて性能の優れたヨットを製作しているじゃないかと。**下重** カーボン製の自転車を見たのが、ヒントになったんですね。

**佐野** 私は、プラスチックや合板ではなく、厚い木材を蒸気で曲げながら作っていく和船に、子供の頃から魅せられてきました。もし、木を使ってカーボン製と変わらない性能を持った自転車を作ってみれば、日本に代々伝わる船大工の技術の凄さを周囲に分かってもらえるのではないかと考えたのです。

**下重** 実際には、どのようにして作っていくのですか。

**佐野** 大木から車体を切り出すわけではない。マホガニー材を0・8ミリの薄い板にし、重ねて張り付けてゆく。そうすることで、木の持つ弾性を最大限に引き出すことができます。**下重** 通常、自転車は、構造上、剛性が強く求められますね。

**佐野** 確かに、トラック競技に使われる自転車は、剛性のある硬いフレームが必



要でしょう。でも、長距離を走るロードバイクの場合は事情が異なるのではないかと。フレームに弾力性を持たせれば、脚への負担を減らすことができる、と考えたのです。

**下重** まさに発想の転換ですね。

**佐野** ある自転車ジャーナリストも、佐野さんは、大変なものを作ってしまったね、といってくれました。

**下重** ヨットも自転車も、ともに風を相手にするという点で共通しています。

**佐野** ヨットというのは、わずかの風を利用して推進力に変えてゆく。もともと風には北風もあれば南風もある。どんな風にも対応できるように、設計しなければならぬ。一方、自転車は、人間から与えられた力を推進力に変える道具。ともに、数学と力学が重要なところは、似通っています。

**下重** 設計やデザインも、自分ひとりでしたのですか。

**佐野** 試作にあたっては、ヤフーのオークションで安い自転車を買って、解体し、徹底的に構造を調べることから、始めました。それから設計を起し、今のデザインに行き着いたのです。

## オランダ王立造船所も認めた価値

**下重** 性能についてはよく分かりました。でも、佐野さんの作られた自転車は、何より見た目が美しい。美術工芸のオブジェとして眺めているだけで楽しめます。**佐野** 自分の作るものはあくまで、人間の道具。芸術品などと、思いついたような気持ちは持ちたくありません。

**下重** 3号、4号機は、オランダの王立造船所から発注を受けて、製作されたのだそうですね。

**佐野** 30歳代の前半に2年間、オランダの王立造船所で働いたことがあり、今もあちらとは交流が続いています。そんなことから、発注をいただきました。

**下重** でも、どうして造船所が自転車を必要とするのでしょうか。

**佐野** オランダの王立造船所は、世界中の王侯貴族や富豪を顧客に持っています。彼らの作るヨットは、一艘が何百億円もする代物。船にはメイドやコックなど何十人も人間が乗り込み、いろいろな備品が置かれます。で、その備品のひとつとして、このマホガニー製の自転車を持ち込みたいというのです。

**下重** とても名譽な話ではないですか。

**佐野** 彼らのひとりからは、カーボン・ファイバー製でこの木の自転車を凌ぐ性能を持つことは可能だけれど、カーボン製でこの自転車の美しさは絶対に表現できない。だから、絶対に自転車作りをやめてはいけない」と励まされました。

**下重** ちなみに1台あたりのお値段はいくらなのでしょう。

**佐野** イタリアのカンパニョーロ製の部品をおつけし、約150万円でお譲りしています。でも、1台製作するのに3ヶ月かかってしまう。船大工の誇りもありますから(笑)。ヨットはこれからも作り続けたい。家具なども作っており、自転車にばかり時間を割くわけにはいかず、嬉しい悲鳴を上げています。

**下重** 現在の製作状況を教えてください。  
**佐野** 今は、5号機の製作に取り掛かっており、3月には出来上がります。それから、小型ヨットを一艘仕上げ、8月からは6号機に取り掛かる予定です。両機のオーナーは、ともに実際のロードレースに出場したいとおっしゃっています。  
**下重** いよいよ実戦の場に打って出るわけですね。オーナーは、傷がついたり、壊れたりしないか、と心配でしょうね。  
**佐野** 一方は富士ロードレースに、もう一方はつくば8時間耐久レースに挑戦さ



**下重 晓子** (しもしゅう・あきこ)  
 1936年生。早稲田大学教育学部卒。NHKに入局。女性トップアナウンサーとして活躍。その後フリーとなり、民放キャスターを経て、文藝活動に入る。著書に『鏡の女』『不良老年のすすめ』『エロイズ・カニングハムの家』『砂漠に風が響んでいる』など。日本バンククラブ副会長。2005年6月より日本自転車振興会会長を、07年10月より財団法人・日本自転車振興会会長を務める。同財団は、名称が08年4月より財団法人JKAI。



**佐野 末四郎** (さの・すえしろう)  
 1958年生。東京都出身。江東区の佐野造船所の3男に生まれる。13歳で、父より船体設計を学ぶ。15歳～18歳の間、外洋ヨットを製作。米国Wooden Boat誌上で、「Sano Magic」と絶賛を博す。80年、工学院大学を卒業。91～92年、オランダの王立造船所で働く。95年にSANO YACHT BUILDINGを設立。本格的にカヌー、ヨットの製作に携わる。2007年、マホガニー材による自転車製作を開始。08年1月に1号機が完成。現在4台を完成させている。

れます。木の自転車がどれほどの性能を発揮するか試したいと思う一方、もし、クラッシュしたらどうしよう、と恐れる気持ちも強いみたいですね。

**お天道様に恥じない生き方を**

**佐野** 私の家内は、会長と同じく、NHKで報道の仕事をしていました。  
**下重** それは奇遇です。どんな番組に携わっていたのですか。  
**佐野** ラジオ番組「午後のロータリー」では、広瀬久美子さんの手伝いをしていました。

**下重** どのようにして知り合いましたか。  
**佐野** まだ私が、実家の造船所で働いていた頃、NHKのディレクターの助手として、彼女が取材にきた。私の作ったヨットで、一緒に海に出ていたりしているうち、親しくなったという次第です。

**下重** それはオランダの王立造船所に行かれる以前のことですね。  
**佐野** 単身でオランダに行くつもりが、彼女も、どうしてもついてくるというので、あわてて、式を挙げ、ふたりで向こうに渡りました。

**下重** それは思い切りましたね。  
**佐野** ところが、彼女は体があまり丈夫



な性質ではない。村のホームドクターに診てもらったら、自転車に乗ることを強く勧められた。私たちの住んでいた場所からスーパーマーケットのある地点まで7キロほど離れていたのですが、そこを自転車ですぐ往復しているうち、彼女は、すっきり健康体になり、その上、子供までも授かることができた。

**下重** 佐野さんは、やはり、よほど自転車に縁のある人。オランダは、国中に自転車専用の道路が設けられ、自転車競技も盛んな国。環境問題がクローズアップされる中、そのオランダに学べ、とばかり、世界中で自転車ブームが巻き起こりつつあります。佐野さんの試みは、これからますます注目を浴びるでしょう。

**佐野** ありがたいことだと思います。私の祖父の吉太郎は、京浜間きつての船大工といわれた名人でした。でも、世渡り下手で……。周囲がどんどん金銀の船に

転向していったときも、うちは木の船だけ作っていたといい。いくら儲かっても溶接などやりたくもない。木を削っているときほど楽しいときはないと見向きもしなかった。

**下重** 佐野さんのもの作りに賭ける情熱は、おじいさま譲りなのでしょうね。  
**佐野** 祖父は私が中学1年のとき、亡くなりました。冬場はストーブの上で石焼イモを温めながら、いろいろな話をしてくれました。好きな仕事に携わって、それでメシが食えればこんな幸せなことではない。ともいつていました。今になれば、よくその意味が分かります。

**下重** そういう気概のある日本人が、少し以前は、周囲にたくさんいました。  
**佐野** お天道様に恥じないように、毎日を生きなさい。というのが、祖父の口癖。随分苦しいときもありましたが、私も、今はこうやって仕事場を持ち、豊かとはいえませんが、好きな船や家具を作って、暮らしています。

**下重** そして自転車との運命的な出会いもありました。これからも、体の続く限り、いい仕事を残されてください。

提供 柳ノカ  
 ◎企画制作 新潮社 ◎写真 田村勇男



**話のサイクル 35**

**泉州路に春を告げる熱戦 いざ、岸和田ダービーへ**



平成21年3月3日(火)～3月8日(日)の間、大阪府岸和田市岸和田競輪場にて、「第62回日本選手権競輪(GI)」が催される。この競走は、GIの中でも最高の格式を誇り、ファンの間からは、「ダービー」の通称で親しまれてきた。

出場するのは、S級S班に在籍するメンメンをはじめとする162人。昨年のグランプリの覇者で賞金王の座にも就いた井上昌己ら一流レーサーが、真の王者を目指し、鏖を削る。舞台となる岸和田競輪場は、周長400m。通常は浜風だが、天候が悪化すると山風が変わる。そんな自然条件を織り込みながらの予想が必要となる。

早春の泉州路に号砲を轟かせる岸和田ダービー。地元名物だんじり祭り顔負けの熱戦を期待しよう。